

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

～ 物理頭のシステム屋が、経済の現場を因数分解する ～

2021年04月

「お金」の法則
(①お金を作るのは誰?)

■■■ これからが面白い人生の始まりだ ■■■

ネクストライフ・コンサルティング

ピカイチ生活経営塾

検索



ピカイチ先生

「お金」を作るのは誰？ (1/2)

10月のマネタリーベース、前年比 20.6%増

日銀が11月5日発表した10月の資金供給残高(マネタリーベース)は、月中平均残高が前年同月比20.6%増の103兆6011億円となった。今年3月以来7か月ぶりに増加率が縮小した(9月は20.9%増)。日銀が先月10日に、約5か月ぶりとなる日銀当座預金残高の誘導目標を引き上げるまで、量的緩和が一服していたことが背景にあるとみられる。季節調整済みの月中平均残高は4.8%増だった。

日銀当座預金残高は同95.2%増の29兆7070億円、日本郵政公社を除いた残高は同77.4%増の26兆9996億円だった。日本銀行券(お札)の発行残高は4.7%増の69兆5638億円だった。

(「日本経済新聞」2003年11月5日)

日銀のマネタリーベースとは、「日本銀行が供給する通貨総量」のことである。すなわち市中に出回っているお金(「日本銀行券発行高」+「貨幣流通高」と、「日銀当座預金」を合計したのもである。

また、同じく日銀が2003年11月に発表した速報値によると、マネーサプライ(通貨供給量)の代表的な指標である「M2+CD」は678.7兆円であった。

『預金封鎖 実践対策編』(2003.12.20 副島 隆彦)より

「お金」を作るのは誰？ (2/2)

広義流動性「1327兆円」という数字が、日本の金融システムを語るうえでの一番大きな数字である。この中に含まれるいわゆる「マネーサプライ」(M2+CD) 678.7兆円のほうは、どうやら金融指標としては意味をなさなくなりつつある。

現金、預貯金の他に、CD(譲渡性預金)や金銭信託や投資信託やCP(コマーシャル・ペーパー)などまで含んだ信用貨幣のすべてを合計した日本の貨幣総量を表わす広義流動性 1327兆円ほうが、ペーパー・マネーの実態をよく表わしている。

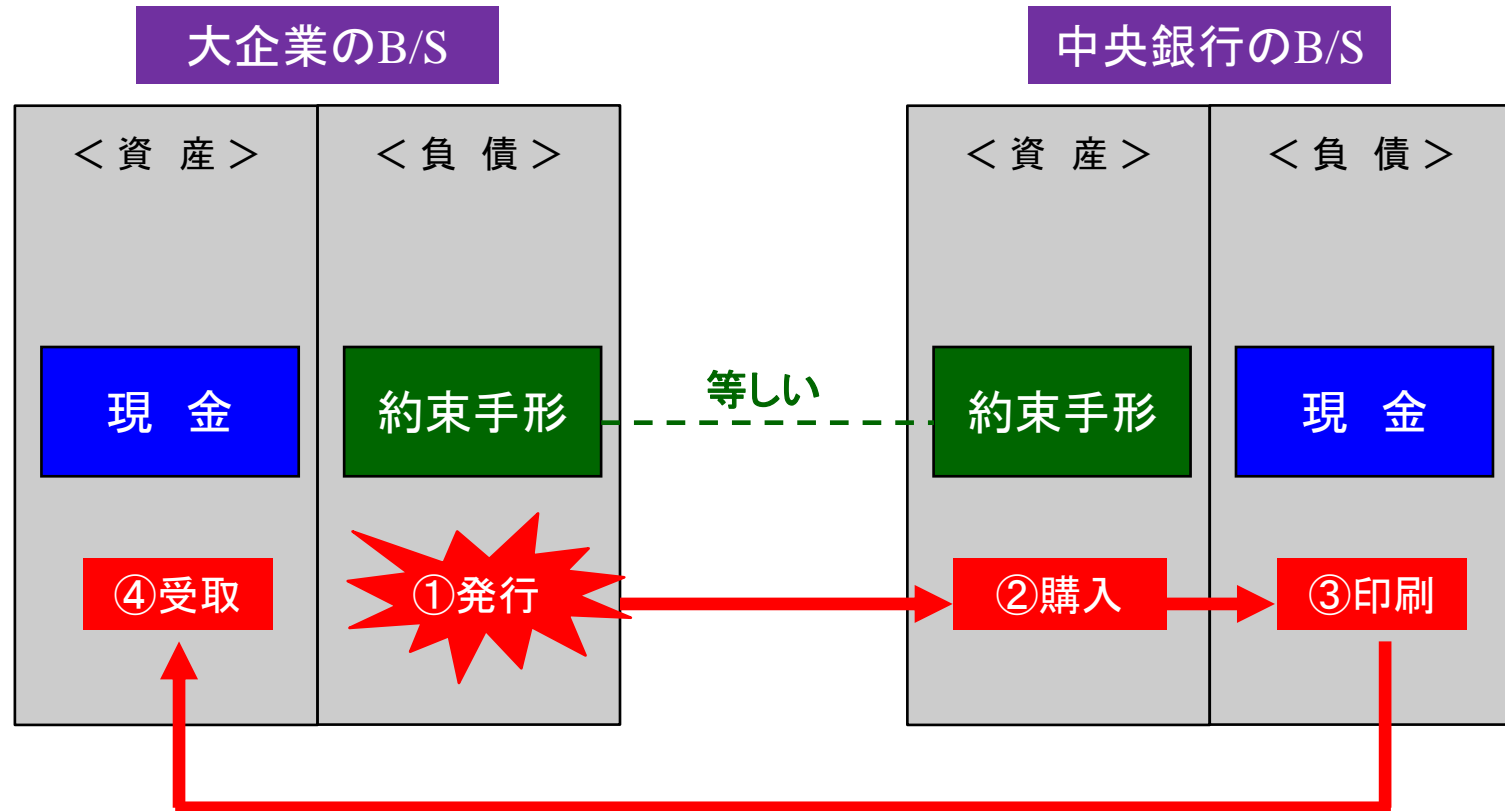
ところが、この広義流動性の日本銀行による統計さえも、実は真実の数字であるかどうか疑わしいのである。

CD(譲渡性預金)とかCP(コマーシャル・ペーパー)などと難しい言葉を使うが、これら「準通貨」は、銀行や大企業が振り出す約束手形のことにはすぎない。それを日銀に引き受けてもらって、大企業が安価な資金調達を行っているということなのである。

日銀の「買いオペ」「売りオペ」などの資金調節は、これらの約束手形を売り買いしているにすぎないのである。だから、その実態は紙切れであるのだから、ペーパー・マネーというのである。

『預金封鎖 実践対策編』(2003.12.20 副島 隆彦)より

企業が「お金」を作る (1/3)



企業が「お金」を作る (1/3)

米連邦準備制度理事会 (FRB) は、3月 17日、企業が短期資金調達のため発行するコマーシャル・ペーパー (CP) を、購入すると発表した。新型コロナウイルス感染拡大による先行き不安で企業の資金繰りが悪化しており、発行企業を支援し、短期金融市場の安定につなげる狙いだ。

CPは、企業にとって運転資金などを調達する手段の一つ。FRBは、CPを買い取る特別な仕組みを設け、ここに資金を供給する。中央銀行が、(民間企業の) 資金繰り支援に直接関与する異例の措置を講じる。CP買い取りは金融危機が深刻化した 2008年にも実施した。

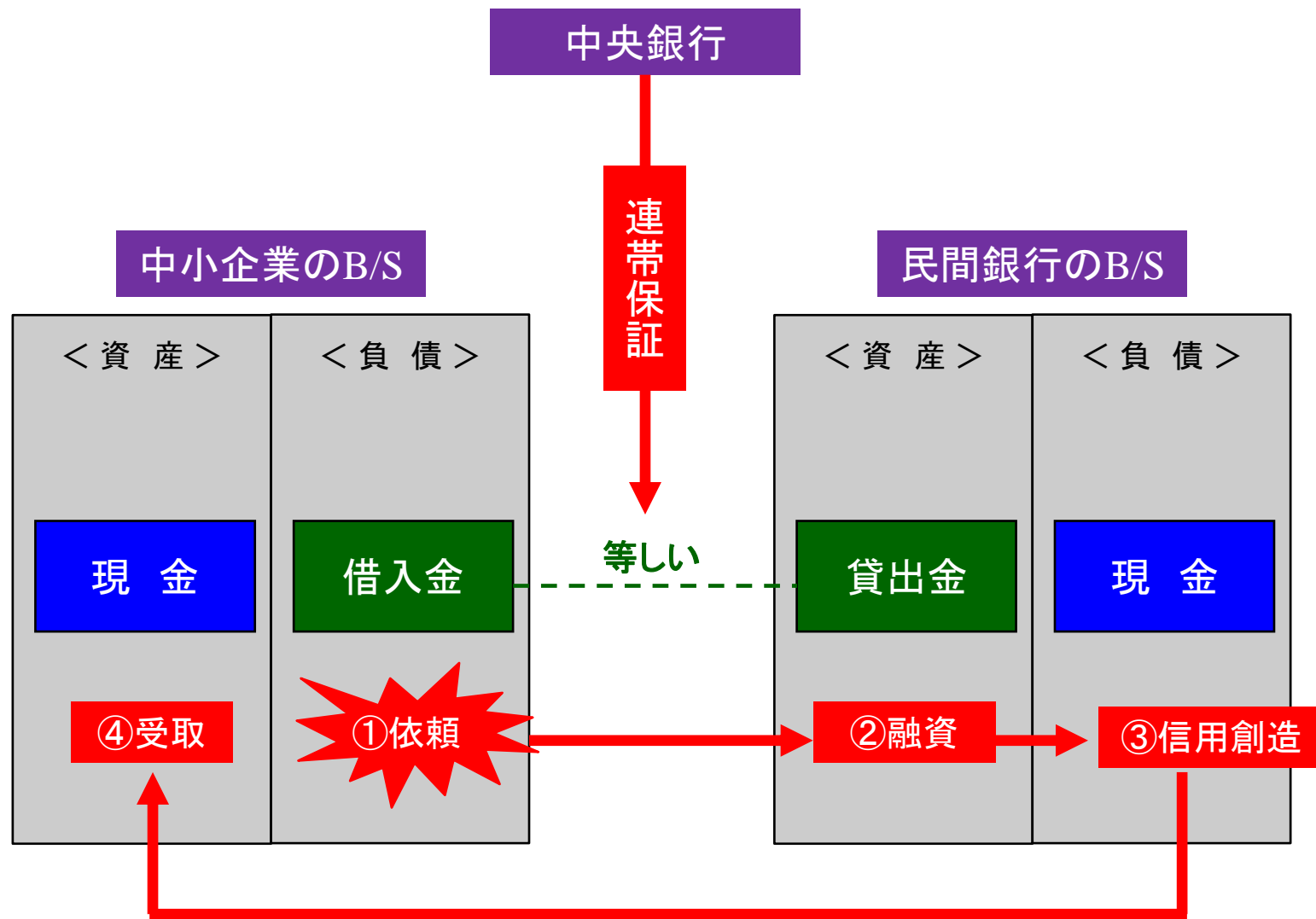
(共同通信、2020年 3月 18日)

CP(コマーシャル・ペーパー) と言うと、何か横文字の立派な金融乗り物だと思う。(だが) こんなもの、ただの約手だ。企業の経理部長が、ガチャガチャと機械で打ち込んで作る約束手形(プロミサリー・ノート)である。

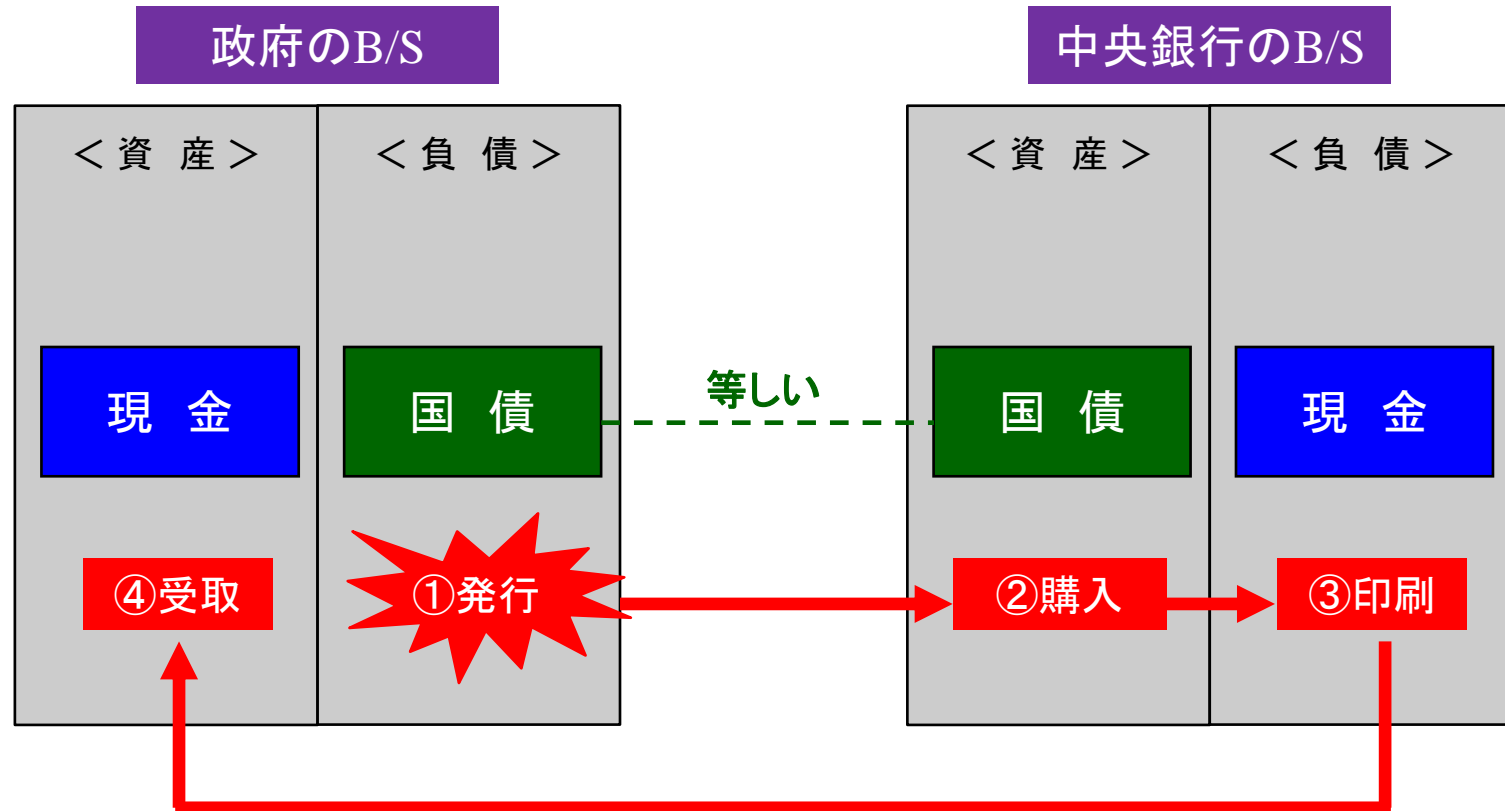
こんなものを中央銀行(日銀もやる)が、「どんどん持って来い。いくらでも買ってやる。資金繰りが大変なんだろう」と、やっている。

『もうすぐ世界恐慌』 (2020.04.30 副島 隆彦) より

企業が「お金」を作る (3/3)



国家が「お金」を作る (1/3)



国家が「お金」を作る (2/3)

クレジット・クリエイション(信用創造)の機能は、民間の経済実態の中にしかあってはならない。

民間の経済活動の中から生まれた資金だけが、本物のお金である。信用創造できるのは、民間銀行だけである。手元に100万ドルしか無くても、10倍、20倍の1000万ドル、2000万ドルを、資金が欲しい人に融通(貸付)することでヨーロッパの繁栄は生まれた。

だが、これを王様(国家)がやってはいけない。王様には生産活動がないからだ。

国が勝手にいくらでもおカネを作って、自分が抱えている借金に穴埋め(充当)するというのは、まともな頭で考えれば、異常な行動である。

自分が抱えている借金を、自分で作ったお金で返済する、ということができると思いませんか。

そんなことは、正常な頭で考えれば、できない。子どものままごとのお店屋さんごっこで、子ども銀行が、おもちゃのお札を作って、他の子どもに配っている話と同じになってしまう。

『金とドルは光芒を放ち決戦の場へ』(2020.11.10 副島 隆彦)より

国家が「お金」を作る (3/3)

それに対して、「いや、こうなったらもう、国家は何でもやってもいいのだ」という考え方が、公然と出てきてしまった。

もう人類は、あとには退けなくなった。「こんなコロナ禍の大変な世界的な疫病の蔓延(パンデミック)があるのだから、非常事態で緊急事態だから、何をやってもいいのだ」という理屈が、堂々と世界中で横行している。

この裏側には、

「もう今より以上に、国民各層から税金を取り立てることはできない。サラリーマン層から今以上、給料天引き(源泉徴収)で所得税を取ると、本当に死んでしまう。

かつ国家の財政は、火の車で、ものすごい金額の借金(累積した財政赤字。王様の蔵の金欠病)なのだから、この際、フィナンシア(大蔵大臣、財務相、セントラルバンカー)は、エクステーカー(現金出納係。中央銀行総裁)と密談、談合して、やってはいけないはずのお金を発行させて自分が受け取る、ということをもうしてもいいのだ」

という理屈になってしまった。

『金とドルは光芒を放ち決戦の場へ』(2020.11.10 副島 隆彦)より

3世紀のローマ
16世紀のキリスト教支配
そして
20世紀は官僚主義の終わりが見える

『恐慌前夜』(2012.12.30 松藤 民輔)より

お金で見る「国家の歴史」 (2/3)

それぞれの時代にできた官僚のピラミッドは官僚のために拡大し、富がなくなると借金を増大させながら運営されてきました。

ローマの繁栄は他国からの資産略奪によって実現し、キープされてきました。植民地の資産がなくなれば、ローマも借金に染まりました。

無制限の借金が繰り返された末に、人民から搾り取る税金ばかり上昇してローマは自己倒壊してしまったわけです。

賢い人はローマから逃げて新しい国をつくりました。

16世紀はスペインの時代になりました。キリスト教がみごとな官僚制をつくって、喜捨する人びとに自由と官僚主義の上位席を用意しました。

喜捨の拡大、それは税金の上昇と等しかったのです。自由の拘束は人びとを新天地に追いやり、スペインは地球上の富の大半を得て、南米大陸、アフリカ発見、そして奴隷貿易で繁栄したのです。

そのスペインもため込んだ富を使いきると、今度は借金を繰り返して、20世紀までに2度のデフォルト(債務不履行)を繰り返しました。

『恐慌前夜』(2012.12.30 松藤 民輔)より

お金で見る「国家の歴史」 (3/3)

ボリビア銀山の発見で流入する銀はインフレ(物価上昇)を呼び、生活に耐えられない人びとは新天地を求めました。フランスやイギリスでも、やはり自由を求める人びとは国を出て、官僚主義から逃げ出したのです。

キリスト教という名の官僚主義は告白(コンフェッション)しさえすれば罪は消える、というシステムです。ゆえに無制限の喜捨と労働を強要できる仕組みだったのです。

20世紀までにできた国々はこのキリスト教官僚制と税金をフルに利用しました。そして、国家の持つ無制限の借金力を使い始めるのです。

国家の富が消えると借金をし、戦争金融の国債を発行して、戦争しながら他国から富を略奪します。この繰り返しが地球のあちこちで繰り返されたのです。

一部のエリートと官僚のために国家は際限なく借金を行い、最後は借金で潰れるわけです。そして税金の上昇、サービスの低下で、ここでも人びとは逃げるわけです。より自由を求めて。

新大陸アメリカも公的債務と中央銀行制度ができると際限ない借金に染まっていきました。

いま、ユーロ危機で実質デフォルト中のギリシャやスペインの近接未来を見れば、来るべき時代が透けて見えます。

『恐慌前夜』(2012.12.30 松藤 民輔)より